

〇三國通覽圖説の梅檀について (津山 倫) Takasi TUYAMA: Discussion on the first record of *Santalum* from the Bonin Islands.

寛文 10 年 8 月 (1670) の漂流民口書は無人島即ち小笠原島が世に紹介された世界最初の確かな記録であつて、「紀州藤代の長左衛門口書」といわれ、同島の植物としては「蘇鐵、しゆる、かしはのき、みさぎ、桑の木、磯とへらの木、やしほの木、ひろうの木」を記録している。又同年の同様な漂流者の「阿波國海部郡淺川浦水主安兵衛、彦之丞、三右衛門口書」は「むく、朴、むくろし、しゆる」などを記録している。これらの漂流者の報告は徳川政府が固く鎖國政策を守つていたにも関わらず、同政府をして同島の公式の探検を行わざるを得なくさせた。これが延寶巡検と言われるもので、延寶 3 年 4-5 月 (1675)、長崎の水主島谷市左衛門 (日本博物年表の「品川船頭」は誤り) の航海指揮によるものであつた。しかしこの時の記録も以前のと同様に鎖國政策の上から、秘匿されて公表されることはなかつた。四方を海に囲まれた我國には漂流の事實は數多かつたが漂流記の上木は非常に少く、南海紀聞、南瀛記など二三に止り、しかも前者は 10 部限定の準秘密出版であり、後者も絶版禁止本となつた (石井研堂：漂流奇譚集)。徳川政府が海外の事情が國民に知られることを如何に恐れたかは、漂流民御覽記に露都で後述の新藏と別れて歸國した光太夫磯吉などの漂流者が妻子と共に江戸番町の「藥草植場」の中で植場手傳の名目の下に一生故郷に歸ることも許されずに言わば飼殺にされた記事があることによつても明かである。

憂國の志士林子平はこのような環境の下に三國通覽圖説を著して國民の目を我國周邊の地誌に惹き、押し寄せる西歐文明の波に注意させようとしたのである。三國とは朝鮮、蝦夷、琉球であり、小笠原島の記述が最後に附加されている。別に地圖 5 葉があり、その中 1 葉は「無人島大小八十餘山之圖」である。子平の編述態度が事實に忠實であつたことは、この書の内容を一見したのみでよく判るが、東都侍御醫、桂川甫周國端が特に序文を寄せて内容を讃していることでも明かである。小笠原島の記事の中、植物に關するものは次の通りである (漢字や句讀點は原文をそこなないように現代化した)。「此島ニ産スル草木及ビ諸物下ニ記ス。然レドモ獸類ハ絶テ無ト云リ。木ニハ根本ニテ一圍許有テ高キ事三十餘尋ノ堅木アリ、是珍トスベシ。又櫻栢ニ似テ甚高キ木アリ。椰子樹、桫欏木、白欒子、カチャンノ木、梅檀樹、榎木、樟木、山柿、藤ノ葉ニ似タル大木、桂樹、桑木等也。草ニハ山歸來、常歸ニ似タル草、丸草の牽牛花等也。」小笠原島の記事の基礎は子平の序文中の「無人島ハ崎陽ノ島谷家ノ記録ニ據レリ。一モ私照ナシ。」及び本文中の「私按ニ彼ノ島谷家ノ記録ニ……」、「安永年中小子肥前ノ鎮臺館ニ遊事シテ崎陽ニ至リア、レントウェルヘイトニ會フ。」などから自身長崎に旅行して世に隠れた上述の延寶巡検の記録を寫したことが明かである。上の引用文は東京大學圖書館、お茶の水大學圖書館及び小生所藏のものを合せて寫本 8 種及び、子平の相續人林通貴の六無齊全書第一編 (明治 19 年)、林子平全集第 2 卷 (昭和 19 年) を参照校合したものである (大

日本思想全集刊行會編、林子平集(昭和7年)には小笠原島の記事が脱落している)。

三國通覽圖説の奥書「天明五年秋、仙臺、林子平圖并説」によつて1785年に書かれたことが判る。また、多くの寫本に「天明丙午夏、東部書林、室町三町目須原屋市兵衛梓」とあるので、翌1786年に出版されたもののようである。これは後述のKlaprothによつて彼の序文中で支持されている。所が東京大學圖書館所藏の和歌山徳川氏舊藏の木版地圖によると「天明五年秋、東都日本橋北室町三町目須原屋市兵衛梓」とあるから、子平が執筆した直後にも確かに出版されたものがあることが判る。寛政4年10月(1792)子平が亙理右中に出した信書に(長田權次郎：林子平、明治29年)「一部や二部は進上可仕候處、御存知之通、當時は絶版被仰付候に付、拂底物に相成、手前にも此一部外無之候故、乍殘念進上は難仕候、種子本に残置可申候」とあるように禁書となり、次いで罪を得て兄の宅に禁錮され、悲憤の中に翌年56歳を以つて死した。

この書は後1832年パリで佛譯出版される運命になつた。譯書の表題は次の通りである。“三國通覽圖説 San Kokf Tsou Ran To Sets, ou Aperçu général des Trois Royaumes. tr. de l'original japonais-chinois, par J. Klaproth. Paris. Printed for the Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland. Sold by John Murray. MDCCCXXXII.” この譯書が出来るまでの事情は新村出：續南蠻廣記の中、「伊勢漂民の事蹟」に委しい。譯者 Klaproth は獨人で、當時20歳の若冠であつたが、後に有数の東洋語學者となつた人である。ロシアのカタリン女帝は東方經營の一方策としシベリアのイルクーツクに日本航海學校を開設し、そこに日本からの漂流者を止めて教師としていた。伊勢の漁民新藏もその一人であつたが、たまたまロシア學士院の招きに應じて入露中の Klaproth はイルクーツクにおいて圖説を入手し(1805年、新村出博士によると、多分蘭人が日本から持出したものらしい。)、これを翻譯せんとして新藏に助力を求めた。Klaproth の譯書の序文によると、Sin Sou はロシア名を Nicholas Kolotyghin と言い、中等程度の教育を受けていたに過ぎなかつたが、母國語に關する限り充分役立つた、しかし漢字は非常に僅かししか知らなかつた、とある。

その譯書の中小笠島の植物に關した部分は次のようである。

“Description des îles Inhabitées” の章の中、p. 258 “Beaucoup de plantes et d'arbres croissent dans ces îles, mais on y voit très peu de quadrupèdes. Il y a de grands arbres qui sont si gros, qu'un homme ne peut les embrasser, et qui ont souvent trente brasses chinoises (de huit pieds) de hauteur. Leur bois est dur et beau. On y voit encore des arbres très haut qui ressemblent au Siou ro (Tsoung liu, ou *Chamaerops exelsa*); des cocotiers, l'arbre qui porte l'areca, celui dont les noix s'appellent en chinois *Pe louan tsu*, le *Katsiran*, le bois de sandal rouge, le *Fou mou*, le camphrier, les figues caques des montagnes, des arbres hauts dont les feuilles ressemblent

à celles du lierre, des cannelliers, des mûriers et autres. / Parmi les plantes on compte le *Smilax china*, appelé *San ki reï*, le *Tô ki*, une herbe médicinale nommée *Assa ghiou kwa* et d'autres."

「山柿」は les figues caques des montagnes である。當時の翻譯の苦心が察しられる。このものは中井博士の研究されたオオバクロテツであろう。なお「カチヤンノ木」は本來は貝多羅樹である〔西川如見：増補華夷通商考（1708）、カンボウチヤ 土産の項「多羅葉」（振假名かちやん）；大槻文彥：外來語源考；及び白井光太郎：アンペラ席の原料植物に就て（本草學論攷第二冊）など參照〕が、小笠原島に關してはビロウに同定する他はない。「藤ノ葉ニ似タル大木」はムニンカラスザンショウであろう。白藥子は石蓮子のにとで、ここではシロツブ *Caesalpinia bonducella* のことと思うが、考證は他日にゆずる。

さて問題は圖説の「梅檀」である。これは S. W. Williams: A Syllabic Dictionary of the Chinese Language, Shanghai, 1874 に

"A red, hard, close-grained wood found in western China, called in imitation of the Sanskrit chandana or sandal wood, but including too the Pterocarpus and Styrax trees; the wood is used for carvings, fine furniture, and boxes"

とあるように勿論 *Santalum* 即ち白檀である。しかし子平の表現は當時の慣用によつてセンダン即ち *Melia* の意に用いられていることは明かであり、實際に小笠原島にはトキワセンダンが多く自生している。これが Klaproth によつて "le bois de sandal rouge" と誤譯されたのである。この場合 "rouge" なる語がつけ加えられたことに對しては、上述の Williams の引用文中の red という表現が、西歐人の少くとも一部には白檀の一屬性として認められていたことを示していると思う（白檀について委しくは白井光太郎：本草學論攷第二及び第三冊の「梅檀の話」を參照のこと）。

日本の開國をせまつた Perry 提督は旗艦 *Susquehanna* 號の上に、條約締結の資料を充分用意したが、その中に Klaproth の譯書も加えられていたということである。この書は後に日本が小笠原島を領有する上に有利な資料として日本側からも提出されたという。Perry の探檢報告即ち F. L. Hawks: Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, 1856 の I: p. 198 欄外には "Extract from Klaproth's translation of San Kokp Tsoir Ran To Sits" が載せてある。それは不正確な翻譯で、誤植もあるが、その一部分は次のようである。

"Many plants and trees grow in these islands, but there are very few quadrupeds. There are trees so large that a man cannot embrace them with his arms, and which are frequently thirty Chinese fathoms in height, (or 240 feet). Their wood is hard and beautiful. There are also some very

high trees resembling the siou-ro-tsong-liu, or chamaerops exelsa, cocoa nuts, areca palms, that tree whose nuts are called pe-eouan-tsy in Chinese, the katsirau, the red sandal wood, the tou-mou, the campher, tub figs of the mountains, a high tree whose leaves resemble those of the ground ivy, the cinnamon tree, mulberry, and some others. / Among the plants the smilax China, (or China root), called san-ke-rei; the to-ke, a medicinal herb called assaghion-keva, and others are to be reckoned”

ここでは「柃檀」は “the red sandal wood” となつている。

The History of the Bonin Islands, 1915. の著者 L. B. Cholmondely 師がその序文において “The fullest information of the islands is contained in a paper read before the Asiatic Society of Japan by Mr. Russell Robertson, British Consul of Yokohama on March 15, 1876” (明治8年) と Robertson を紹介しているが、彼はこの論文中で小笠原島における原住民の植物方言を数多く紹介した後に次のごとく述べている。 “In addition to the above mentioned and those already noted there are on the Islands, wild plum and crryhe, orange, laurel, juniper, and box wood tree, sandal wood, marmottao, wild cactus, curry plant, wild sage and celery. Mosses, lichens and various kinds of parasitic plants abound” (Trans. As. Soc. 4: 137). この中 “wild cactus” は Klaproth の “les figues caques des montagnes” の誤譯ではないかと思われる。この記事中にも “Sandal wood” があるが、原住民の呼稱を紹介していない所から Klaproth 或は Hawks によつたものと思われる。

以上の記述によつて、小笠原島における *Santalum* の古い記録は誤譯に基くものであることが判る。小笠原島に自生するムニンビヤクダン発見のもようは本誌15: 697に詳述してあるが、結局1928年5月2日當時小笠原島營林署長であつた豊島恕清氏が父島、袋澤村小港で採集して、當時東大教授であつた中井猛之進博士に送つた標本が1929年博士によつてムニンビヤクダンと命名され、1938年小生によつて確かに *Santalum* であるとされた経過が小笠原島における白檀の発見史に他ならないのである。上述の諸記録が後世を誤らせないように一筆した次第である。尙東大に保存されているムニンビヤクダンの最古の標本は、父島咖啡山農場南端峯で1915年5月川手文^{カザル}氏が採集したものである。この標本は未鑑定のまま久しく同島におかれていたが、小生が同島の林業試験場清瀬試験地の岡部正義氏から寄贈をうけたものである。尙、同島での眞の白檀の栽培の初は岡部正義氏によれば大正11年、豊島恕清氏によれば大正7年で新しいことである。

この記述のために Klaproth の譯書のあることを教示され、今は稀な Robertson の論文を寫眞に撮つて惠送された九州大學の江崎悌三教授に厚い感謝の意を表する。なお東京大學圖書館司書官永峰光名氏の提供された諸便宜に對しても深謝する。